



第3回「科学の芽」賞の授賞式・発表会開催!

附属学校教育局 教授 小林 汎

12月20日(土)午後1時より、朝永振一郎記念第3回「科学の芽」賞の表彰式・発表会が、約110名の参加により、筑波大学学生会館の特別会議室で行われました。

表彰式は、岩崎学長より、受賞者一人一人に表彰状と記念の盾が贈られ、受賞者と握手をしてその努力を称えました。また、発表会では、小学生部門11件(受賞者12名)は附属小学校の白岩先生が、中学生部門9件(同11名)は附属中学校の角田先生が、受賞者それぞれにインタビューする形式で、発表を行いました。高校生部門の3件(同6名)は、各受賞者がパワーポイントを使って5分間の発表を行い、附属駒場中高の濱本先生が講評しました。さすが高校生と感ぜさせる非常にうまい発表が印象的でした。最後は学長を囲んでの懇談、学長との記念撮影、6月に出版した『もっと知りたい!「科学の芽」の世界』(筑波大学出版会)のサイン会もあり、和やかなうちに終了しました。

今年は1,248件(小学生部門:682件、中学生部門:519件、高校生部門:47件)の応募があり、昨年の1.5倍に増えました。審査過程においても応募作品の質の向上が実感され、審査委員は嬉しい悲鳴を上げていました。また、昨年は日本人4名がノーベル賞を受賞するニュースもあり、

これからも子どもたちの「科学の芽」を育て、そして「科学の花」を咲かせていく必要性を痛感した表彰式・発表会でもありました。



朝永振一郎記念 第3回「科学の芽」賞表彰式・発表会 2020年12月20日 筑波大学

温故知新

「教育は人なり」の精神を受け継ぐ

附属坂戸高等学校 副校長 小林美智子

附属坂戸高等学校はもともと1946年に、近隣の町村が統合して農業後継者育成を目的とした学校組合立坂戸実務学校、坂戸実修女高校として創設されました。

当時東京師範学校の坂戸農場が隣接しており、農業研究や教育実習の必要から本校と大学の坂戸農場とは一体的環境にあったのです。そして地元を中心として多くの人々の力により、1953年に東京教育大学附属となりました。地元の多くの期待を受けスタートした国立坂戸高校は他の国立附属にはない職業科目を中心とした教育を展開し、地域社会に貢献する、いわゆるコミュニティースクールであったのです。これは学校教育本来の姿であり、今日にずっと引き継がれている本校の精神でもあります。

また、国立移管後も財政は苦しく、大学や文部省(当時)に陳情すると「校舎と設備は地元で整える条件だ」ということだったようです。「国立大学附属にふさわしい高等学校を創設しよう」を合い言葉に教師、生徒、保護者、地元が一体となり、苗木を植え、グラウンドを踏み固め、手作りの教材や器具で授業を行い、多くの優秀な卒業生を社会に送り出してきました。まさに「教育は人なり」の信念のもと学問的教養と、熱心で愛情に満ちた人間性が何よりも重要であることを実践してきたのです。この精神が現在にも受け継がれ、1978年筑波大学附属坂戸高校となった後も多くの研究成果を発表し評価を得てきました。さらに1994年には全国に先駆けて総合学科高校に変身し、総合学科教育の先覚者として努力してきました。総合学科高校のパイオニアとして多くの役割を果たす中、教科「産業」の開発をし、キャリア教育を中心に多くの実践的研究をすすめています。今後も、大学との連携を強め、本校の社会貢献への潜在的能力を発揮し、現代のコミュニティースクールとしての質の高い高校を目指します。



附属の今 附属大塚特別支援学校

附属大塚特別支援学校 副校長 神田基史

本校は、明治41(1908)年、東京高等師範学校附属小学校の特別学級として発足しました。その中心的役割を担ったのは附属小学校第三部主任樋口長市でした。樋口は後に東京高等師範学校教授として東京盲啞学校校長、日本聾啞教育会会長を兼務されるなど障害児教育界では著名な先達です。また、担任に抜擢されたのは愛知県第二師範学校(後の岡崎師範)を明治34年に卒業し、同校附属小学校に6年訓導として勤務していた小林佐源次です。初年度の入級児童は、小石川区内の公立小学校3校から諸調査をもとに7名(金富小1名、礪川小2名、柳町小4名)を集めました。それから百年が経ちました。

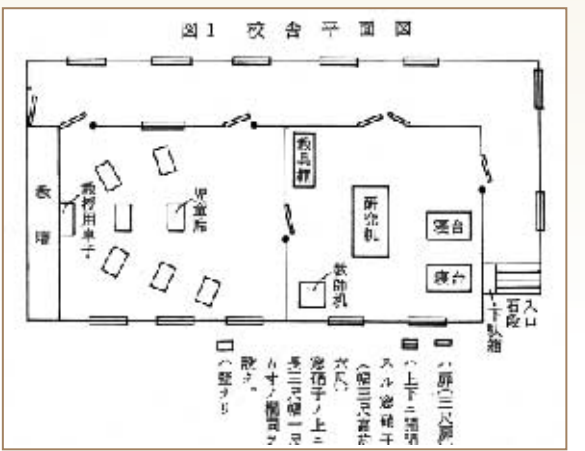
また、昭和35(1960)年に附属小第五部(2学級)と附属中特殊学級(2学級)を母体として東京教育大学の附属養護学校として認可され、占春園北側にあった補助学級の木造校舎(附属小学校では第五部と呼ばれていま

した)の地名に因んで附属大塚養護学校の看板を掲げました。昭和39年に現在の春日1丁目の高台(水戸藩上屋敷跡地の一部)に校舎を新築し、名実共に新しい附属学校として生まれ変わりました。国立大学の附属特別支援学校として、平成22(2010)年に50周年を迎えます。

現在は幼稚園から高等部までの4学部構成で定員76名、教員数37名の学校になっています。知的機能の発達に障害をもつ本校幼児・児童・生徒の教育は、実際の体験・経験と実際の生活に密着した具体的な事象・実物を教材として重視し、一貫して「生活による生活のための教育」を進めてきました。昨年12月に特別支援学校幼稚園部、小学部・中学部、高等部の学習指導要領の改訂案が示されましたが、大学と共に知的障害を核とした教育研究を進め、その成果を広く発信することが本校の大きな使命です。



旧校舎(明治41年~昭和35年)



新任教員奮闘中

よりよい授業をめざして

附属小学校教諭 梅澤真一

「やろうとしていることが子どもの姿として表れていない」「子どもの声にもっと耳を傾けたほうがよい」「授業は、子どもが取り組んでみたい、解いてみたいと思うような教材を用意することが大切だ」「子どもと教師の関係がしっかりとよくなる学級をつくりあげよう心がけるとよい」。

私が着任して、初めての授業研修会で先輩方から学んだことである。先輩の授業をみる目は厳しい。悪いものは悪いとはっきり指摘する。自分ではほとんどん考えて授業を行っているつもりでも、言われて初めて気づくことがたくさんある。後輩を育てようという愛情に満ちている先輩のご指導だからこそ私が取り組まなくてはならないことが明確になる。それらの課題を解決しようとするがうまくいかない。「私には、附属小の教員は務まらないのではないか」という焦りと不安の中で、附属小学校の教員としての生活が始まった。

10ヵ月が過ぎた。相変わらず未熟である。今は、2月の公開の授業をどうするか悩み続けている。アイデアを生み出す苦しみは以前とさほど変わらないが、今は少し楽しいと思えるようになってきた。それは、この10ヵ月の間に、多くの授業と清里合宿や運動会を共にのりきって

きたことで、少しずつ子どもとの関係がしっくり始めたことや、私の社会科授業を楽しみにしているとってくれる子どもが現れてきたことのうれしさからくるのだと思う。

子どもの期待に応えたい。附属小学校の教員だと胸を張って言えるようになりたい。よりよい授業を目指して、一步一步山に登るように努力を重ねたい。

